

HIP HOP の新王者 Kendrick Lamar

目次

1,なぜ Kendrick Lamar を研究しようとしたのか

2,Kendrick Lamar の生き立ち

3,Black Lives Matter

4,Alright

5,ピュリッツァー賞

6,まとめ

7,後期について

1,なぜ Kendrick Lamar を研究しようとしたのか

まずなぜ、Kendrick Lamar（以下、ケンドリック）を研究しようとしたのかは、自分自身HipHop や RAP に傾倒していくうちにケンドリックの HipHop 界での立ち位置や、存在感に独特の物を感じたからです。また今回この研究を一緒にする事になった、和久田くんとは普段、音楽の会話をしているうちにお互いケンドリックラマーが好きだという事がわかり、今回この研究一緒にする事になりなした。また最近、特に熱を帯びている Black Lives Matter (BLM) のデモ運動の中でケンドリックの Alright がデモ隊の群衆の中で、歌われている映像がありました。ケンドリックの Alright がデモ隊の中にいる黒人または、BLM の運動に賛同している白人にとってどういう意味をもっているのか、またその背景にある黒人に対する差別の現状、黒人を採取するようなアメリカ社会の構造、にもケンドリックを通じて軽く触れて行けられていければ良いなと思いました。

2 , Kendrick Lamar の生い立ち

ケンドリックは、カリフォルニア州コンプトンで生まれました。コンプトンと言えば、HipHop ファンにとっては聖地でもあり危険な犯罪都市である事はよく知られています。例を挙げるなら N.W.A が出会い結成したのもこの土地です。ケンドリックの父親もシカゴのストリートギャング、ギャングスター・ディサイプルズの元メンバーで、ケンドリックの家族はブラッズと結び付いてたそうです。またケンドリックが8歳の時、地元コンプトンで2パックとドクタードレーのカリフォルニアラヴのpv撮影を生で見て感銘を受けたとインタビューで語っていました。このコンプトンという土地柄によりケンドリックがヒップホップに走るという事は凄く自然な成り行きだったんだなと思いました。しかしケンドリックが他の人と違ったのは、学校を首席で卒業したり、ティーンエイジャーの頃、ギャング行動にはしる友人が多い中、彼は真面目に学校に通っていたようです。

この事からケンドリックが他のギャングスター・ラッパーとは違い、単に暴力や金の話ではなく、歌詞の中に文学性や哲学的な部分を感じ取れるのは、このような経験や背景があるからではないのかなと推測しました。

3 , Black Lives Matter

最近、日本のメディアでもこの BLM が取り上げられる様になりました。まずこの BLM を日本語に訳すと「黒人の命は（も）大切」という意味です。この BLM の始まりは、2013年7月に、丸腰であった当時17歳のアフリカ系アメリカ人のトレイボン・マーティンをヒスパニック系の混色であり自警団だった当時28歳のジョージ・ジマーマンが口論ののち射殺した事件で、最終的にマーティンを射殺したジマーマンは正当防衛により無罪になりました。この事件の判決に対して再度ジマーマンを十分な取り調べをし逮捕するという何千の抗議の声が SNS 上で Black Lives Matter というハッシュタグにより広まったのが起源です。また最近になって何故またこの運動が盛り上がっているのかと言うと今年5月にアフリカ系アメリカ人の黒人ジョージ・フロイドが白人警官の不適切な拘束によって死亡させられた事件が特に大きく関わっています。彼の頸部を警官が膝で強く押されつけ苦しむ彼が、「I Can't Breathe (息ができない)」と何度も言っている動画は、非常に世界に衝撃を与えました。このように黒人であるが故に不当な死を受ける例は、たくさんあります。それには、アメリカ社会の構造自体が刑務所産業や企業の経営陣に白人が多いなど、黒人を採取する様な仕組みになっている事も関係しています。これに関しては、Netflix にある「13th -憲法修正第13条-」などを観ればより深く知ることができます

4, Alright

この *Alright* という曲は、ケンドリックの3枚目のアルバム[*To Pimp a Butterfly*]に収録されています。この「*To Pimp a Butterfly*」というアルバムは、ファンク、ソウル、ジャズ、スパークン・ワードの要素を取り入れており、非常に高い評価を得ています。また先ほど紹介した動画の通り *Alright* は、BLM の運動においてアンセムとも言える様な曲になっています。その中には *Alright* の歌詞が深く関係しています。この曲のケンドリックの Pre-Chorus、「Wouldn't you know, we been hurt, been down before (知ってんだろう、俺たちは傷付けられて落ちてたんだ)」「Nigga, when our pride was low (俺たちの自尊心が低かった時は)」「Lookin' at the world like, "Where do we go? (世界を見て「俺たちはどこへ行くんだ?」って思うんだ)」「Wanna kill us dead in the street fo sho' (あいつらは絶対にストリートで俺たちを殺したがってる)」（一部抜粋）

この歌詞にある様に、黒人は差別される事によって、自分達は悪いという意識を持つてしまい、また差別主義的な思想をもった警官に不当に逮捕されたり殺されたりと、行き場のない思いで生きている人は少なくないです。

また、ファレル・ウィリアムスのフック「Nigga, we gon' be alright (俺たちはきっと大丈夫)」「We gon' be alright (大丈夫なんだ)」「Do you hear me, do you feel me? We gon' be alright (聞こえてるか? 分かるか? 俺たちは大丈夫なんだ)」このフックには、黒人の差別や貧困、孤独という絶望を大丈夫だと本気で信じれば大丈夫なんだと言う前向きな意味があります。

この曲には、黒人の差別問題に対しネガティブな内容もありながら最終的には、信じれば大丈夫だとポジティブな内容になっています。この事から BLM の差別を無くしより良い社会にしようという運動の中で、一種の希望の曲になっている事がわかりました。

5, ピュリツァー賞受賞

ケンドリックは、3枚目のアルバム[*To Pimp a Butterfly*]でグラミー賞ではマイケルジャクソンに次ぐグラミー史上2番目に多い11部門にノミネートされました。（ラップミュージシャンとしては最多）最優秀ラップソング、最優秀ラップアルバムなどの5部門を受賞しました。

また4枚目のアルバム「*DAMN.*」でもグラミー賞、主要2部門を含む、7部門にノミネートされ、最優秀ラップパフォーマンス賞、最優秀ラップ/サングパフォーマンス賞、最優秀ラップソング賞、最優秀ラップアルバム賞からなるラップ4部門を制覇。そして最優秀ミュージックビデオ賞を加えた5部門を受賞しました。

そしてラッパーとして初の快挙となるピューリツァー賞を受賞しました。

同賞の委員会はアルバム「*DAMN.*」について「現代を生きるアフリカ系アメリカ人の複雑な人生を捉え、土地や文化に根付く本物の言葉やリズムのダイナミズムを統合した高水準な楽曲を収めた名作」と評しました。

この事からケンドリックはマイノリティな黒人・ヒスパニック系の若者が産んだ HipHop というカウンターカルチャーを1つ上のレベルへ押し上げる事に貢献したのではないかなと個人的に思います。

6,まとめ

この研究によってケンドリックラマーは、現代の急速に変化しようとしている、フェミニズムの問題や人種差別問題（特に黒人に対する）、マイノリティに属している人達の精神性や問題について、ケンドリックラマーは自身の黒人というアイデンティティを通して、音楽や歌詞に高尚に消化している事から、時代を映す鏡としてこの先何百年もの間、評価され続けるんだろうなと思いました。また Hip Hop を芸術として次のレベルに押し上げたのも彼の功績によるものが大きいんだなとわかりました。ケンドリックラマーが「ヒップホップの新王者」と言われる所以を理解する事ができました。

7, 後期の研究について

後期の研究については前期で、2010年から2020年の10年間を象徴するラッパーとしてケンドリックラマーを調べたので、後期は2020年以降に活躍するであろう新世代のラッパーやミュージシャンを調べていこうと思いました。